

北京で『口承資料のデータ処理に 関する国際会議』開催

何彬[※]

2011年5月19日・20日に北京にて「Documentation and Archiving of Endangered Languages and Oral Tradition: Researches and Interdisciplinary Approaches」が開催された。この「世界の滅亡に瀕する言語と口頭伝承伝統に関する学際的な研究」は、中国社会科学院の2011年フォーラム「CASS FORUM 2011」として開かれ、中国以外に、フィンランド、フランス、アメリカ、オランダ、日本、フィリピンから参加があった。

中国社会科学院は、1977年に設立され、中国における人文・社会科学の最高の国立研究機構である。その下には31の研究があり、各研究所は対外的に学術交流や共同研究などを積極的に行っている。今回のフォーラムは、「中欧社会科学共同研究プロジェクト」の一環として、民族文化研究所（所長・朝戈金）とフィンランド文学学会、オランダのライデド大学が共同で実施した三年間の研究計画であり、今回はその最終年度の成果報告の会でもあった。フォーラムは二つの課題：1 口頭伝承の採集と採集資料の分類および採集資料のデジタル化の基準 2 口頭伝承資料のデータバンクに関する諸問題と技術処理、民俗学理論とデータ処理、をめぐり二日間に亘って論議を添加した。

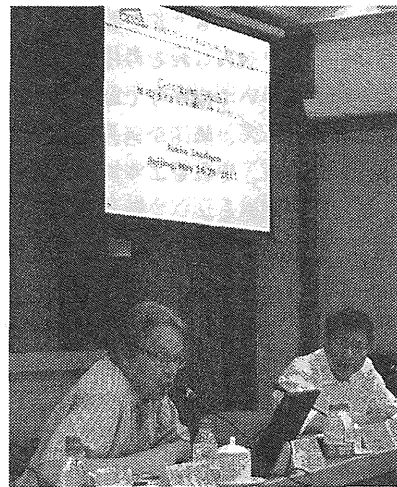
発言者は、中国社会科学院民族文学研究所所長・朝戈金、フィンランド文学学会民俗古文書館ローリ館長、フランス国家科学研究センター（CNRS）ニカ教授、オランダライデン大学地域研究所オナイ、アメリカミズリー大学・口頭伝承センター、フォー主任に加え、日本から神奈川県立文化研究所の佐野賢治所長、

※ 首都大学東京教授

首都大学東京の何彬教授が招待され講演した。

フォーラムは、調査・分析結果を発表する一般的な学会発表と違い、民族叙事詩やそれらを歌う現場記録の映像データの保存措置とネット上の公開の可能性、民俗資料保存法と展示法、管理する際のデータの基準作り、言語人類学による多言語、多民族地域の資料を展示する際の諸問題、音声・音楽・映像のデジタル化における方法、デジタル化が寄与する民俗学理論の展開、民具名称の国際的基準とデジタル化、などの講演を軸に、質疑応答に多くの時間が割かれた。

さらに、講演者は問題提起と同時に製作して公開したHPの展示も行った。口頭伝承と伝承の現場といった音声と動態的な資料をいかに分類し、保存するか、加えて保存されている音声と動態の資料をいかに国際共通の基準で分類し、検索できるシステムや、管理システムとして提供するかについて相互に意見交換をした。口承文芸および民俗学における資料のデジタル化、デジタル資料の分類、国際的に共通する管理法により共通に利用できるかに関する思考と実践の展示であるが、このフォーラムの特徴であり、今後民俗資料保存と展示に一つの方向を示していると言える。



写真：フォーラムでの発表風景、パワーポイントが縦横に使われた